令和元年度　第１回堺市歴史的風致維持向上協議会（書面開催議事録）

○日時　令和２年４月２３日から５月１５日まで

○委員

増田昇（大阪府立大学大学院名誉教授）
小浦久子（神戸芸術工科大学教授）
橋爪紳也（大阪府立大学研究推進機構特別教授）
宗田好史（京都府立大学教授）
大野広（大阪府教育庁文化財保護課長）

議事１　令和元年度堺市歴史的風致維持向上協議会収支決算見込みについて

全会一致で承認

議事２　令和２年度堺市歴史的風致維持向上協議会収支予算案について

全会一致で承認

議事３　中間評価について

増田会長　各項目の自己評価は、妥当な評価と考えられる。

なお、今後の対応の中で、対面・対人的活動が、今回の新型コロナウイルス感染症対策の中で、かなりの制約を受けると考えられるが、文言の修正の必要性はないのでしょうか。祭礼なども、かなりの影響が出ると思いますが。

百舌鳥古墳群の周遊に関しましても、現状では、映像を撮影して、動画配信を行うなど、ネットをさらに活用した情報発信の在り方が、これを機会にさらに高まると考えられますので。

取り組みＢの百舌鳥古墳群整備事業に関連しまして、大仙公園の整備計画の見直し、策定の件や、社会実験としての気球の件は、触れておく必要は無いのでしょうか。

小浦委員　個別事業が事業目的をどのように達成できているかということや、外からの評価（来街者数や売上げ、広報効果など）だけでなく、事業が実施された地域の生活者がどのように評価しているのか、その地域や生活環境の課題に対してどのように寄与できているか等の評価の視点が欲しい。また、環濠の水質改善も個々の文化財整備としてだけでなく、古墳群としての評価、地域の水環境や生態系との関係など、地域に根ざした評価もあるのではないか。公式の報告書はこれで問題ないが、土地利用が変化し、スポンジ化も言われる社会状況下で、成長期と同じ指標で評価せざるを得ない実態が難しいと感じた。

橋爪委員　「市民意識調査」に関して、平成25年度から平成28年度にかけて「堺市は歴史資源や文化資源を身近に感じることができるまちだと思う」と答えた市民の割合が増加している点は本計画及び市の施策の成果と考えてよい。ただ数字的にはまだ十分であるとはいえない。「さかい歴史まちづくりフォーラム」の参加者へのアンケートでは、計画の認知度がまだまだ十分ではないことがあきらかになった。今後計画を広く市民に周知するフォーラムや広報の充実が求められる。

宗田委員　百舌鳥古墳群が世界文化遺産に登録され、陵墓を中心に堺市内の文化遺産への関心が高まった。それと並行して、古墳だけでなく、近代まで続く堺の歴史文化に全国の注目が集まるよう歴まち計画が役立った。堺市は古代以来、各時代それぞれに、奈良、京都、大阪に劣らず、近畿のみならず日本史上の重要な役割を果たした。しかし、歴史文化都市としての評価は、その本来の価値に比して高くなかったと思う。今回のコロナ禍で、当面はインバウンドも国内客も伸びないだろう。そんな時こそ、地元住民、市民の理解と関心を高める取組みを進めてほしい。オーバーツーリズムは、地元民よりインバウンドなど外からの観光客が多すぎて、地元民の思いから離れたところで、観光客が訳も分からず行動するから起こる。今こそ、地元住民、市民が深く理解し、誇りに思う機会になる。そのための歴まち政策がますます重要になる。その成果がすでにみられる。やがて必ず戻ってくる訪問者への備えになる。

大野委員　平成25年度から令和元年度までに実施した事業について、歴史的風致の維持及び向上に関する基本指針の（1）から（4）に沿って実施できていると認められる。

特に（4）都市魅力の発信と共有において、重点区域の一つである百舌鳥古墳群について、古市古墳群を有する羽曳野市や藤井寺市とも連携して、その意義・魅力を市民に一層理解いただくよう働きかけたとともに、国内・海外に対しても精力的に情報発信を行ったことが、令和元年7月の世界遺産登録という大きな成果につながった。

令和2年度以降も引き続き、重点区域内の文化財の保存と活用に努めるとともに、新型コロナウイルス感染症蔓延による来訪者の大幅な減少が危惧されるものの、百舌鳥古墳群ガイダンス機能の整備をはじめ、国内および広く世界にその素晴らしい価値を伝えるよう取り組むことを期待する。

議事４　令和元年度進捗評価について

増田会長　ガイダンス施設の整備を除いて、計画通りの進捗との評価は妥当と考えます。

小浦委員　個別事業の進捗は理解したが、これらの事業が相互にどのように関わっているのか、これらの事業でどのような地域づくりが進んだのか、総合的な位置づけがあるとわかりやすい。

宗田委員　「歴史的建造物の周辺市街地の環境」を古墳群と環濠の周辺に限っていることが、歴まち計画に策定された事項に沿ってのことだとは思うが、今後の課題だと思う。周辺だけでない、中心市街地全体の都市計画、景観計画が定まらず、歴史都市・堺を創ろうという発想がない。だから、文化財として守られるべき点とそのごく狭い周辺を守ればいという、まさに守りの姿勢になり、老朽化で町家取り壊しが進み、計画が進捗しない結果に終わってしまう。歴まちを文化財行政のアリバイづくりに使う時代は終わった。人口減少が加速し、訪問客も当面期待できない中、他の産業、製造業やサービス業がコロナ禍で苦しんでいる。何のために歴史まちづくりを躊躇するのだろう。堺の産業経済を起死回生する秘策があり、そのために市街地全体をコントロールしないでおくのだろうか。もうマンションが建たず地価も上がりそうもない。

大野委員　五大紙やテレビ番組など多くの報道で取り上げられ、事業の効果が表れていると考えられる。

百舌鳥古墳群ガイダンス施設については計画変更になったが、ガイダンス機能は必要であり、早急な対応が求められる。

議事５　令和２年度事業予定について

増田会長　新型コロナウイルス感染症対策の中で、対面・対人的活動が、かなり制約される中で、事業展開の見直し等の必要性が発生しないのか、どうか。

見直しが必要な場合には、どのタイミングで、どのような見直しをするのか、検討しておくことが求められると思います。

橋爪委員　ガイダンス施設の整備を断念し、既存施設のガイダンス機能の整備に変更した点は了解しているが、今後大仙公園全体の抜本的な改修を含めて公園全体でガイダンス機能を担うという発想のもと、ガイダンス機能のさらなる充実が求められる。

宗田委員　堺市は過去十数年に渡り、「古墳群」という第一級の文化遺産の世界遺産登録を推進したため、それ以外の文化遺産がその陰に隠れてしまったと感じる（私自身も登録推進に関係したが、）。中世都市とその環濠、近代都市堺も、他の都市にあれば、第一級の文化財である。登録なった次年度以降、【環濠都市区域】により比重を置き、歴まち事業の中心に据えていくことを考えてほしい。その意味で、来年度事業はまだ有形無形の個々の文化財保護策の延長でしかなく、中世以来の歴史都市堺の歴史の重み、その深い文化性を総合的に捉える視点を欠くと思う。西欧のリバプール、マルセイユ、ジェノバ、ヴェネツィアなどと比肩する歴史都市だということを示し、創造階級が集める都市となるためには、【環濠都市区域】の再生が鍵になると思う。

大野委員　　百舌鳥古墳群ガイダンス機能を適切に整備いただきたい。

観光ボランティアや地元協議会活動の支援など市民との協働活動を引き続き促進していただきたい。

議事６　計画変更について

増田会長　　ガイダンス施設の整備に関しても、今回の緊急事態宣言の影響が、危惧されますが、予定通りの進捗の目途が立っているのでしょうか。コメントの付記は、必要ないでしょうか。

宗田委員　　古墳群ガイダンス施設の慎重な見直し策は時宜を得たと思う。小さくてよかった。“小さく生んで大きく育てる”見直しが望まれる。古墳群の大部分は「陵墓」であり、史跡など普通の文化財とは異なる歴史的、文化的、社会的意味、価値をもつ遺産である。そこにどのようなガイダンス施設を置くか、何をガイダンスするかという点について、見直し後のプロポーザル案の審査を通じて、実は誰もまだ十分に考えてはいなかったのだと感じた。どれも、何この鍵穴の形？という程度だった。

伝統産業次世代牽引策が、いつまでも「もののはじまり何でも堺」という観点は弱い。泉北コンビナート等、全国有数の先端工業都市堺の片隅にひっそりと継承された伝統産業に、思いの他、立派な歴史があったという認識は改めるべきだろう。打ち刃物の世界的評価に見られるように、全国どこにでも残る、ただの伝統産業ではない点を認識すべきだろう。世界の注目を活かした振興策が考えられるべきだろう。